

「(ベトナム国家大学ハノイ校) 参加報告書」

京都大学文学部2年 (皆木香渚子)

- ① 今回のプログラムに参加したことで、今まで文献から得た知識と実状とを結びつけることができた。例えば、ベトナムではインフラ整備が立ち遅れていると聞いていたのだが、交通事情と水回りの状態を知ることによって、身をもって感じることができた。まず、交通事情についてであるが、留学前に、ベトナムでの交通渋滞は激しいと聞いていたが、実際の渋滞状況は想像以上であった。幹線道路でも一般道でも絶えることなくバイクやタクシーが往来し、クラクションの音が四方八方から聞こえる。時速20~30kmで走行するのがやっとである。道幅の広い道路沿いを数分歩いただけで、すぐに目やのどが痛くなり、一緒に歩いていたベトナム人の友人はマスクが必須だと言っていた。また、水回りについてであるが、ハノイでは冬以外お風呂のお湯が出ないのは、ごく一般的であるとベトナム人の友人から聞いた。留学中に滞在したホテルでお湯が出ないことを不便に感じたが、ベトナム人にとって、夏場はお湯が出なくて当たり前なのであろう。ベトナムの水回りの話をしてくれた友人の「日本ではいつでもお湯が使えるから、みんな肌つやがいいのね。」という言葉がとても印象的であった。今回の留学によって、ベトナムで体験したインフラが未整備であることの困難さを解決したいと強く思うようになった。私は地理学専修に進むつもりであるが、地理学でインフラ整備の方法を学び、専門知識を身につけ、将来は途上国のインフラ整備に関わる仕事をしたいと思うようになった。また、今回実際に文献で得た知識を実感したことで、他の知識についても、実感を伴うものになりたいと強く思うようになった。もともと発展途上国に興味があるのだが、次回以降のSENDプログラムにも参加し、発展途上国に実際に赴いて、その実情を知るために留学したいと考えている。
- ② 今回のベトナムで最も痛感したのは、言語障壁の大きさである。現地で私たちの案内してくれたベトナム人の友人たちは、いくら日本語を学んでいるといっても、母語と同じように言いたいことを表現できるわけではない。日常会話で用いられる単語一つとっても、日本語で言うのは苦労しているように見えた。そのような時、もっと自分がベトナム語を話すことができれば、せめて単語くらいもう少したくさん覚えていればよかったのに、と悔やまれた。ベトナムでも英語は通じるだろうと高をくくって、ベトナム語の勉強量が不十分なまま留学してしまったことを後悔している。今後、留学の機会に恵まれることがあれば、せめて日常会話レベルの現地の言葉くらいは話せるようになるべきであると感じた。
- ③ プログラムの内容に関して、USSHでの授業は興味深いものが多かった。特に英語の聴講の授業が面白かった。Lam Minh Chau先生の農村部における市場経済への移行の授業では、ベトナムの経済発展の仕方の特徴や市場経済化による影響を豊富な写真付きで説明していただき、勉強になった。ULISでは、プログラムにかなり変更があったことや、教授が授業にほとんど姿を現さないことがあり、物足りなく感じた。どちらの大学でも、日本語の授業には「参加する」という形であったが、ほとんどの授業において、学生数人とフリートークをするに終わってしまったのが残念であった。さらにもったいないことに、ベトナム人も日本人も、相手の母語で自分の考えを伝えることも、相手の考えを聴いて理解することもできなかつたので、フリートークといっても、沈黙する時間も、少なくはなかつた。せめて、何について話すかあらかじめ決めておけば、双方とも事前に準備して、もう少し有意義な話ができただろうかと思った。事前に準備するといっても、そのディスカッションをするために必要となる単語を調べる、などの初歩的な準備でよいと思う。
- ④ 進路への影響について、①で述べた通り、ベトナムのインフラ環境を目の当たりにしたことで、発展途上国のインフラ整備に携わる仕事がしたいと思うようになった。大気汚染の程度や水回りの不便さに大きなショックを受けたからである。また、インフラ整備は自分の専門分野(地理学)が活かせると思っている。以上のことから、今回のベトナム留学は自分の将来の進路の方向を決定する大きなきっかけとなった点で、私にとって非常に有意義であった。